

選ばれ、その年の六月ごろタシケント―ナホトカ経由で、無事日本に帰ることができました。

今になってつくづく考えてみると、約三年間、苦勞にもめげず耐え抜いた強い体に育ててくれた両親に感謝するとともに、保護兵にしてくださった軍医殿が救いの神のように思えてならない。

あのような出来事が二度と起こってはならない。子供や孫たちがあのような局面に遭遇したとき、そのようなことを考えると恐ろしくなってくる。人並みの生活ができればよい、平和の尊さを深くかみしめて平和を祈っております。

現住所 熊本県下益城郡城南町藤山五二〇

生年月日 大正六年八月十七日

入 隊 昭和十三年八月一日 歩兵一三連隊

終戦時の居住地 満州国奉天市

入ソ日 昭和二十年十月九日

抑留地 タシケント

作 業 建設現場の雑作業

引揚年月日 昭和二十三年七月十二日

ソ連抑留

神奈川県 香坂 毅

満州奉天文官屯九二八部隊で終戦を迎えた一週間後、マンドリン（自動小銃）を肩より掛けたソ連兵が、十数台のトラックに分乗し進駐して来た。私は、ソ連統治下になって一カ月後、日本に行くことを決し数名と逃亡する。しかし二日目、運悪く八路軍と遭遇し、全ての金品を略奪される。終戦とともに、日本人を大人（たいじん）と尊敬、従順にしていた満人も、手の平を返すように変心し、暴行略奪の限りを尽くし、果ては殺人まで、日本人はどこにいても命の保証はなく、治安の悪さは想像を絶する世相だった。

このようなところにはいはいずれ死を待つだけだと考え、窮余の策として部隊へ逆戻りしたが捕われ、九月二十八日、北陵収容所に連行される。皇姑屯駅こうこ屯より有蓋貨車に詰め込まれ、家畜同然の扱いで輸送される。

貨車は常時、カンボーイ（監視兵）に外から扉を施錠され、給食給水以外は扉を開くことはなかった。皇姑屯を出発、四平、新京、哈爾濱、北安と北上を続け、十月二十六日、満州最終地点黒河に着く。長い間、窮屈で不自由な貨車生活に心身はもちろん、足腰まで弱り、体力が極端に衰えたことを自覚した。黒河にて四日間露営し、大豆、砂糖、高粱などの船積み作業をする。三十日、今後の輸送計画について通訳を通じて伝達があった。「あなたたちは、アムール川を渡河、対岸の街ブラゴエシチェンスクよりウラジオストックを経て日本に帰るのだ」という嬉しい内容に肩を抱き合い喜んだ。

渡河後、数キロ離れた野原まで、木材、有刺鉄線の運搬作業をし露営する。翌三十一日は小雪舞う生憎の日だった。ブラゴエ駅構内に停車の有蓋貨車に昼過ぎ詰め込まれる。空気が遮断されたような息苦しさの中、じっと我慢する。天井近くの換気孔から差し込んでいた光が次第に変化し、やがて暗くなったころ、やっと動き出した。

「この調子だとウラジオストックには明日あたりかな」と話し合っていると、貨車はすぐ止まり、まるで行く先を探しているようにまた走り出す。翌朝、突然、古年兵の一人が、自分の水筒のキャップを指差し、「この磁石だと貨車は完全に北上しているぞ」とわめき出したので、たちまち車内は蜂の巣を突ついたらうな騒ぎとなった。今の今まで帰国を信じていただけに、裏切られたショックは大きく、ソ連の汚い政策にふんまんやる方なく罵る。しかし今となつては籠の中の鳥、無念ながら諦めるより仕方がなかった。

貨車は我々の心情を無視するかのごとく、昼夜を問わずひたすら走り続けた。車内に無数に打たれた鋸が、我々の吐く息で真つ白に凍り付き冷凍室を連想させた。少しでも寒さを凌ぐため毛布を被り、芋虫のような格好で横になる。希望を失った我々は、日が経つにつれ極端に口数も減り、食事の時以外は専ら黙想していた。満州からの過酷な食事内容で、カロリー不足の長旅が原因で栄養失調になり、名も知れぬ遠きシベリアの地で無念にも命を断った人たちのことを思い、心よりご

冥福を祈った。

飢えと寒さと自由を束縛された貨車生活も、満州出發以来五十日目の十一月十六日、カザフ共和国テケリに到着し、第四十地区第八收容所に入る。夜は不気味な狼の遠吠えを耳にする人里離れた山岳地帯。宿舍内は二段式の寝台が向かい合って並列し、藁布団と毛布一枚が支給された。もちろん電灯はなく、ランプが所々に形式的にあつたが用をなさず、日が暮れると眠るしかなかった。翌々日、ソ連軍医による奇妙な体力判定検査が行われた。軍医が腹の肉を手でつまみ、即座に等級が決定された。これに基づき職場も決まり、即、黒パンに影響した。私は判定の結果三級（軽労働）だったので、ノルマ（割当基準量）が低く、作業は辛くなかったが、その代わり食事が少なく、体力を維持することが大変だった。入所以来、過酷なカロリ不足が三カ月ほど続いたところになると、オーカー（病弱者）をはじめとして栄養失調による病人が続出し、死に至る者が出始める。何とか体力を保持するため、満州より大事に持ってきた下着類、石鹸、靴下、

手拭いなど交換できる品物はすべて黒パンに化けてしまった。飢えと寒さのテケリでの生活後、同地区アルマアタ第五收容所に移送される。もし、あのままテケリに残されていたら、命の保証はなかっただろうと述懐した。

アルマアタでは、キルピーチ（煉瓦）工場で働いた。体力のあるソ連人を基準にしたのか、ノルマは厳しかった。当時、異常な建築ラッシュで煉瓦の供給が間に合わず、毎日「ダワイ、ダワイ」の叱咤に明け暮れた。こうして精いっぱい労働をしても、朝夕二回で二百グラムの黒パンを得るのは至難だった。收容所生活での一番の楽しみは食べることに寝ることだったが、その双方共ままならなかった。食事はノルマで縛られ、後者は、南京虫とシラミに終始責められ、睡眠不足と精神的苦痛に悩まされ、オーカーなどは、間接的に死に至った者まで出た。

シベリアの冬の凍土は、表面はコンクリートのよう

に固く、埋葬に必要な深さの穴を掘るのに、相当な労力と時間を要した。浅い穴だと春の雪解けとともに土

が流れ出して露出し、野犬に荒らされると聞いたので、少しでも深く掘ろうと汗を流した。入ソ以来、故国日本の土を踏むまでは死ねないと言っていた同胞、ソ連のさまざま不条理にもじつと耐え忍んで頑張つて来られたのに、その望みも果たせず、さぞかし悔しかっただろうと述懐する。

狂瀾のまにまに

石川県 寺西次作

一、無線通信兵から幹候へ

大東亜戦争もたけなわの昭和十九年三月末、召集令状を受けた。当時私は、金沢市近郊の内灘村大根布国民学校に奉職していた。新任教師として一年経つた時であつた。

四月一日に東京世田谷の近衛野戦重砲隊へ入隊しなければならぬ。取りあえず下宿先の後始末だが、当時は宅急便もトラックもない。もちろん自家用車もな

くて、自分で背負つて帰るより仕方がなかつた。

東京には私も父も行ったことがなく、叔父と三人で上京した。初めての東京の町はただ驚くばかり。人々に聞きながら、まず二重橋前へ行つて皇居を遙拝。今度は世田谷の部隊近くで宿を求めねばならない。どこを訪ねても旅館は満員。途方に暮れていた折、通りがかりのおばさんの親切で、一晚ご厄介になれたが、お守り袋を頂き、部隊まで見送つてくれたご一家の名前は「黒田圭蔵」。あれから五十年を経た現在もお守りを身につけているが、黒田さんを捜し当てる手がかかりはまだまだにつかめない。

入隊して一週間経つか経たぬかの深夜、起こされて完全軍装。渋谷駅から乗車してどことも知れず発車、列車は全部鑑戸をおろしたまま着いたのが下関。海を渡り朝鮮を北上して、着いた所が新京であつた。

落ち着き先は新京南嶺にある関東軍固定通信隊であつた。集まつた初年兵は北海道から沖縄までの寄せ集め、口論などすると外国語を聞いているようだつた。演習は歩兵訓練と通信訓練であつた。通信は電鍵を